希望の道標

vol.9

取材・文／広重隆樹
撮影／冨永智子

なにをやっても大変なんです、人生は

松井久子 *Hisako Matsui* 映画監督

まつい・ひさこ●1946年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。雑誌のライター、俳優のマネージャーなどを経て、85年テレビ番組の企画制作会社エッセン・コミュニケーションズを設立。番組プロデューサーとして活躍した後、98年公開の『ユキエ』で映画初監督。文化庁優秀映画作品賞などを受賞。製作・脚本・監督を務めた『折り梅』は、自主上映運動の力もあり、観客動員数200万人を突破。2010年11月20日に3作目となる日米合作映画『レオニー/Leonie』が公開された。著書に『ターニングポイント―― 『折り梅』100万人をつむいだ出会い』(講談社)がある。

私の98年の監督第一作『ユキエ』は、国際結婚をしてアメリカに住み、晩年にアルツハイマー症を発症した日本人女性を描いた作品です。2002年の『折り梅』でも、実話をもとに認知症の女性と彼女を介護する嫁との関わりを描きました。それまで、介護する側を描くことはあっても、される側が描かれるということはあまりなかったのではないでしょうか。映画制作の過程でこの病気のことを深く知るにつれ、私は「人間は何があれば生きていけるのだろうか」ということを考えました。

この病気で一番苦しんでいるのは患者本人です。かけがえのない記憶が徐々に失われていく不安で、自分は生きていていいんだろうかと悩む。『折り梅』でも息子に包丁を渡し、自分を殺してくれと叫ぶシーンが出てきます。

日常の細々とした記憶はもちろん、家族の名前や存在さえ忘れてしまう、そのように悲惨な病気ではありますが、それを支えるのはやはり人と人の関係です。人間がその人らしく生きるために、最低限必要なのは周囲からの承認だと思います。「あなたはそのまま生きていていいんですよ」という肯定。それによって、本人も介護者も救われる。困難を乗り越えるなかから新しい喜びが生まれることもあるのです。

最新作の『レオニー』もまた人生の困難に直面する女性の話です。彫刻家イサム・ノグチの母、レオニー・ギルモアは言葉もわからないまま、イサムの父親である野口米次郎を頼って明治の日本に渡ります。しかし、彼にはすでに別の家族がありました。それがとりわけ非難されることのない男尊女卑の時代です。すぐにアメリカに戻ることも可能だったかもしれませんが、彼女はそうはせず、11年間日本に住み、英語教師をして自活しながら子ども二人を育てます。

自分の運命を人のせいにし、被害者意識のまま鬱々と生きていくより、困難から逃げずにそれに立ち向かう人生。そうした前向きの人生、それもスーパーマンではないふつうの人間の強さに私は惹かれ、それを描き続けています。

■

私自身、監督としての第一作は50歳のときでした。今では映画監督の仕事によろこびを感じていますが、最初から監督をめざしたわけではありません。ただ、折々訪れた転機には、臆病にならず、むしろ貪欲に取り組みました。そこでがんばり、人々の承認を得られるようになると、次のチャンスが飛び込んできた。監督になってやっと、これがやりたかったんだ、とわかりました。

若い人たちが自分の職業を考えるとき、やりたいことが見つからないという話はよく聞きます。けれども、10代でしっかりとした職業観があるほうがむしろまれなこと。「私には向いていない」と簡単に投げ出さず、与えられた仕事に真正面から取り組むことが大切ですよね。成果が得られるまでに何十年かかってもいいじゃないですか。なにをやっても、人生というのは大変なもの。そのうちきっと果実が熟すように、その人ならではの仕事と人生の実りが得られるのだと思います。

■

映画づくりは、失敗すれば二度と新たなチャンスはない、経済的にも体力的にも大変な事業で、とても自分の子どもには継がせたくない仕事ですが、儲かるかどうかという以前に、時代を超え、国境を越えて人々に感動を与える映画をこそ、次の世代に残さなければならない。私たち団塊の世代特有の感覚かも知れませんが、そういう使命感が今の私を突き動かしています。

その志に共感したボランティアのネットワークが生まれ、私の映画作りを支えてくれています。できるかできないかわからない映画を支援してくれる。映画という素晴らしい体験を、送り手のスタッフと受け手の観客が共有する。その過程を通してお互いが成長していく。そんな映画づくりをこれからも続けていけたら…と願っています。